そろそろ関西ブンド総括
「反帝反スタ」批判は継続する課題

高原浩之　2024 年 12 月 20 日

原均さんが死去しましたが、ある人が「追悼」の中で、「1970 年」当時の関西ブンドの指導部を、以下のように批判していました。

①塩見が上京し第二次ブンドの指導部に入ったのは勝手な行動であったのにそれを批判しなかった。②「12/18 ブンド」の分裂で原均さんは武装闘争と非合法党を堅持したのにそれを放棄し大衆運動に逃げ込んだ。

この批判には、事実の間違いがあるし、大きな違和感です。それで反論したのですが、そろそろ関西ブンドの総括なのだ、と感じました。

(1)関西ブンドが大挙上京　しかし挫折し敗北　そういう認識と総括が重要

塩見とか誰かの個人的行動ではありません。68 年第７回大会を機に上京し第二次ブンドの指導権を握る、これは関西ブンドの組織的集団的な行動でした。指導部だけでなく、京大や同志社や大阪市大からグループで数年にわたって上京し、東京都･東部や神奈川や千葉に地区党を建設した。関西で支える活動も含め、蓄積された総力の投入でした。

指導権を握ろうと、大きくは３回の試みがありました。①68 年：学対と学生運動を握る。②69 年：上京して建設した地区党を基盤にグループ（後の赤軍派）を結成する。③70 年：12/18 ブンドを結成する。しかし、全て挫折し敗北しました。

第二次ブンドの指導権を最終的に継承したのは、戦旗派でした。その基盤は東京の学生運動なので、①が挫折した結果でした。もっと根本的には、戦旗派は中核派の亜流なので、東京において、関西ブンドが、理論でも（「過渡期世界論」と「反帝反スタ綱領」）、実践=大衆運動でも、中核派に対抗できなかった結果でした。

(2)情勢認識を誤り武装蜂起･革命戦争をやろうとした　根本はマルクス主義の欠落

武装闘争や非合法党が「1970 年」総括の中心ではないでしょう。もっと重大な問題がありました。誤って革命情勢と認識し、国際的なベトナム反戦闘争の中、学生運動=全共闘運動を基盤に武装蜂起･革命戦争をやろうとし、結果は赤軍派の破綻と連合赤軍事件でした。その根本には革命の根拠と原動力に関する誤りがあった。それが中心でしょう。

関西ブンドは第７回大会で、「過渡期世界論」の「三ブロック階級闘争の結合」を打ち出しましたが、そこでは、日本革命を、ベトナムや中国などアジアの民族解放･社会主義革命からの、外からの国際的波及で展望している。日本社会主義革命の根拠と原動力を、日本資本主義に内在する矛盾とそれを反映した労働者階級の階級闘争に求めていない。

原均さんの「資本主義批判」の契機は、戦旗派が依拠する宇野経済学の「労働力商品化論」の批判でした。資本家と労働者の関係は対等な交換関係ではない。「労働と所有の分離」。生産手段を独占する資本家に無産の労働者が隷属している。

それが、赤軍派と連合赤軍の総括で最大の導きになりました。社会主義は「労働と所有

の再結合」。隷属に対する労働者階級の階級闘争が、生産手段を資本家階級から奪還して共同所有とする。社会主義革命は資本主義の内在的矛盾を根拠とし、労働者階級の階級闘争を原動力とする。こういうマルクス主義の基本に初めて立脚した、と言えます。

(3)第一次ブンド中央の革共同移行に反対
「反帝反スタ」批判は関西ブンド創設から続く

現在の論点は中国論、かってのソ連論の続きで、最も重要である。中国は、官僚制国家資本主義であり帝国主義であるのに、中核派は何か社会主義的と幻想している。米国・日本と中国の対立は、両方とも帝国主義的覇権闘争であるのに、中核派は米国・日本の中国侵略と見ている。「中国侵略論」は嘘、嘘では対中国・祖国防衛主義を突破できず、日本人民の自国帝国主義打倒の闘争は組織できない。突破し組織するには、真実、「覇権闘争論」を言わなくてはならない。この論点で「反帝反スタ」批判は喫緊である。

・『かけはし』と『未来』に注目　「反帝反スタ」は中国論で崩れる

「反帝反スタ」は「ガラパゴス理論」だが、源はトロツキズム。第４インターはもう中国を「資本主義」「新興の帝国主義」「国家資本主義」と規定している（『かけはし』９/23 号）。

中核派の、中央から分派した関西派はどうか。「中国は共産主義への過度期の歪曲形態の社会」（『未来』11/７号）。まだ中央派のソ連論・中国論を引きずっている。

問題は経済的土台、生産関係である。「過渡期」という生産関係はない。哲学用語の「歪曲」ではなく、社会主義か資本主義か、経済学的に規定しなくてはならない。

ソ連でも中国でも、生産手段が法制的には国家所有でも、実際は官僚が所有し独占して階級化し、無産の労働者階級を隷属させている。官僚制国家資本主義である（「労働と所有の分離論」に基づく資本主義規定を適用）。それがスターリン主義である。

「反帝反スタ」では、政治的上部構造の官僚主義を批判するだけになっている。浅く薄い。経済的土台を批判する深さと厚さがない。唯物論ではない。観念論になっている。

・「自己決定権」が現代世界認識のキーワードで起動点

しかし、関西派は唯物論的現実を見ている。「その最大の矛盾が農民工問題」。「もう一つの矛盾が少数民族問題」。「台湾人民は、中国とは独自の道を歩むことに確信を持ち、命を懸けて闘う気概を持っている。」　すでにウクライナの対ロシア・自己決定権を支持している。いずれ、中国による圧迫と侵略に対する台湾の自己決定権と祖国防衛を支持するだろう（中核派中央は台湾もウクライナと同じく「代理戦争論」だろう）。そこから関西派は結局は、中国を資本主義・帝国主義と認めることになるのではないか。

・「対革マル戦争」の総括が第２の論点　中核派は自己批判しないが…

内ゲバは清算しなくてはならない。社会主義革命のプロレタリア階級独裁は、一党独裁ではない（それはソ連も中国も官僚制国家資本主義=スターリン主義）。プロレタリア階級の前衛を自認する複数 or 多数の党派による連合・共闘となる（八派共闘が全共闘を指導した経験）。こう認識し確認しないと内ゲバは清算できないのではないか。（おわり）